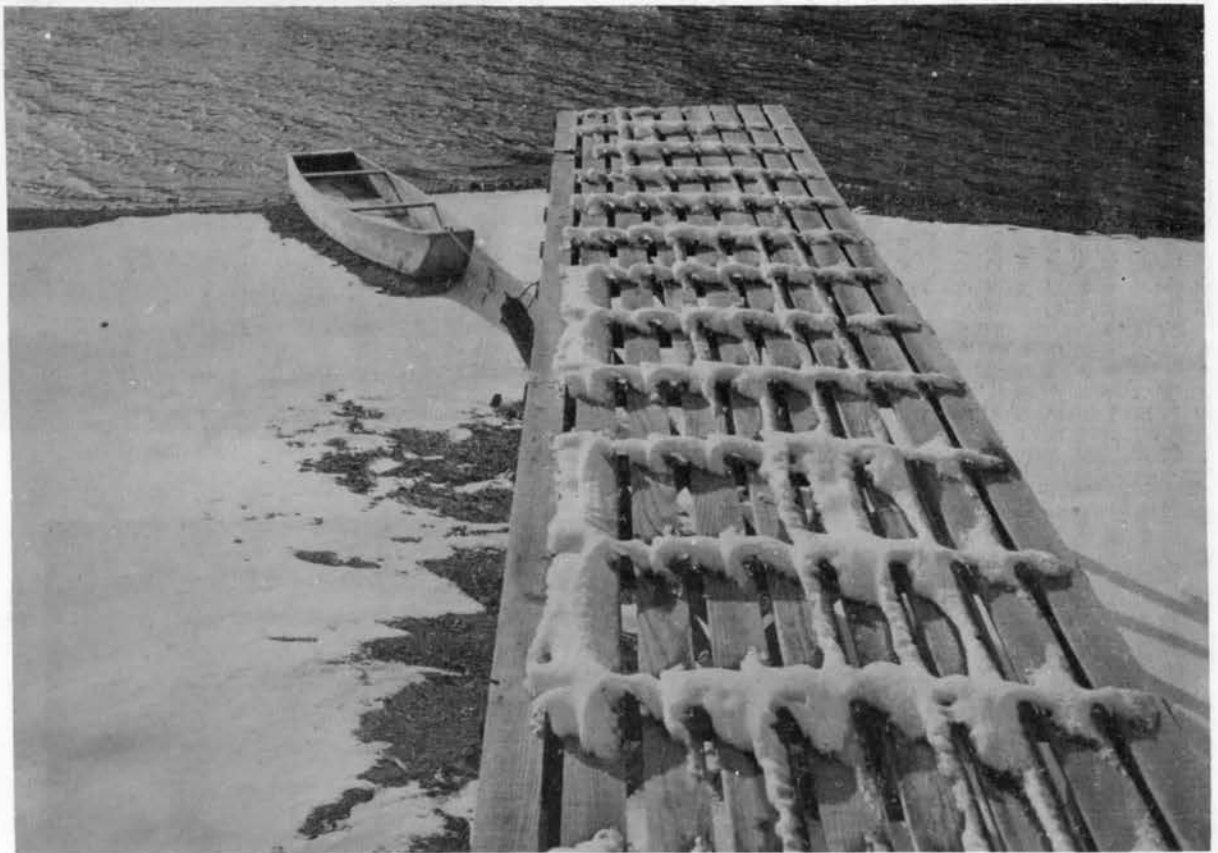


# 山と博物館

第19巻 第12号 1974年12月25日 大町山岳博物館



冬枯しふく頃—木崎湖—

撮影 丸山隆士

## 社会教育と私

／おばあちゃん頑張つてえ／可愛らしい孫の拍手に送られて幾分緊張しながらステージに向う老婦人、新婚の夢いまだ覚めやらぬような若妻。明治、大正、昭和の三部合唱ならぬ三世代の母親達から成るコーラスグループは、十人程のグループから五十人もの大編成になった。年に一度の発表会に参加することに意義を求め、日頃の練習の成果を発揮しようと胸を張り目を輝かせて精一杯合唱する熱心な姿をまのあたりに観て思うことは、ハイモニイの素晴らしさについてであった。歌唱力があるかないかはよくわからないが、一人一人の声が合わさって、より美しいハイモニイがつくりだされるということに、大きな意義を認めた。音楽に国境なく、人種や老若男女の別もなく、歌声の響くところに平和ありという真の人間社会の理想郷を夢見ながら、ふと現実に戻り、現代社会の様相を思いやった。量産化とコスト引下げに狂奔する産業機構は、仕事の細分化により人間を機械の部品と化し、本来の労働による創造のよろこびを人間から奪い、人間疎外の現象を激化させた。そして、生産された物質の消費の追求に世はまさに「消費は美德」と言われるまでに発展して物質偏重の観念で固められ、人の心をこの世から放逐する結果となった。しかしながらこの消費の世も、一九七三年来の石油パニックを契機として漸く資源の有限性を認めざるをえなくなり、世界的な経済状況の変化とともに必然的に「節約時代」へと転換を迫られている。この機会こそ「もの」を考え、「こころ」を忘れた現代の風潮の中から人間の心を清純化し、情操をたかめ、生活に喜びと闘いと豊さをもたらし、おおらかで明るい人作りに役立つ文化創造の活動を積極的に推進すべき時ではないだろうか。

母親コーラスグループの連帯感の強さを肌に直接感じながら、社会教育の第一歩は、まず多くの人に参加してもらうことではないかと思つた。(大町市公民館長 田原法人)

# 越中の嶽越え道開修 (1)

下坂宣一

昭和四十九年十一月、大町市文化祭を行うにあたり、その実行委員会を開催して、歴史にみる大町登山口——針ノ木峠——という特別展示を行うことに決定したが、針ノ木峠の歴史を振りかえってみる時、宗教・狩猟時代を別として、近代登山の黎明期を間近に迎えようとする明治の初年に、通称・加賀街道、または針ノ木新道といわれている「越中への嶽越え道」を開削した。

野口村の庄屋、飯島善右工門親子のことについて究明が不備であることが指摘され、私と山岳博物館の千葉・荒井の両君がこれにあたることになった。十月の或る日、大字平、野口の飯島一男氏宅を三人で訪ね、沢山ある古文書、絵図類の中から「越中への嶽越え道開修」に特に関係あると思われる古文書のコピーと当時の立札ならびに、工事人足入山札(実物)等を飯島氏のご好意によって拝借し、特別展示させてもらったことは、針ノ木峠の歴史の意義を一尽深めたものと思う。更に今回、その古文書の一部をここに掲載して同好者の利便に供したいと思う。

## 飯島善造親子について

標高三千米に達せんとする、北アルプスの山々への道路は宗教・狩猟・漁労・伐木等のため古くから開けたようであるが、北アルプス北部の信・越国境はカモシカも寄せつけなといわれる黒部川の渓谷と唯一の道と考えられるザラ峠、針ノ木峠越えの道は江戸時代に入り、加賀前田藩領として、交通の取締りがきびしく制限されたため、遂にかつての古道もたえてなくなつてしまつた。

しかし黒部渓谷を中心にして隣り合せる、信越両国の住民は他領を通らずに直接交通、交易することができないだろうかという強い願望をもつてた。こうした願いと夢をかきた人が野口村の飯島善造であつた。

飯島善造は天保三年(一八三三)五月八日更級郡孟津村(後の日原村)日名の庄屋牛越佐市の弟として生れ、十八歳の頃野口村の庄屋飯島善右工門の養子となる。元治元年八月

五日善右工門隠居(又左工門と改名)したため、善右工門を襲名野口村庄屋となつたが、明治維新の折り改名野口村庄屋と称し野口村戸長、平村副戸長等の要職を務め明治三十九年(一九〇六)七十二歳で隠居し、明治四十一年(一九〇八)六月三十日、平村九拾貳番地で病没する。

飯島家は元上伊那郡飯島村の郷士であつたが戦国の頃その戦禍をさけて野口村に至り住んだが、三子あり、その長子を西沢家(野口村の庄屋)に養子となし、次子は分家させ、三子をもつて家督をつがせてきた。そんな関係で代々野口村西沢家の後見的立場にあつたが、左右村の西沢家から養子に來た善右工門(隠居後又左工門)は野口村の庄屋西沢氏が

大町組大庄屋を拝命した折その後を継いで野口村の庄屋となり、猫鼻や高瀬川堤防並びに大蔵宮抄改修に尽力する。(祖父寅一郎の書残し文書により、飯島一男氏談)そのかたわら、「越中への嶽越え道開修」をなさんとし



料金を示す高札

て、尽力したことがうかがえる。  
〔北国協街道〕(附録)

本村より西に入、籠川に添い、越中の国へ通ずる山路あり。此路を開かんと、天保年中の頃より、當村野口耕地飯島善造の親、善右衛門なる者、開路の見込を立、旧御領主並加州御領主へ出願に及と雖も、其頃新道の許可なく、空しく成居る。(長野県町村誌)。

嘉永三年十一月、信州安曇郡野口村より越中新川郡足倉御姥尊橋まで嶽越の道およそ十一里二十一丁余の新道の開設を計画。塩、綿布、肴、笠、□類、富山菜などの輸送を出願

したが不許可となる。(中島正文「峠の古文書」より)

このようにして出願たびたびに及ぶも遂に許可を得ることができず、江戸も末期元治元年(一八五四)に家督を養子(後の善造)に譲つて退隠した。家督を継いだ養子は善右工門を襲名して庄屋になつたが、幕藩体制が崩壊し、明治政府の基礎がつくられるようとする誠にも忙であり、かつ変転極まりな時勢に対処しながら、善造の頭をかすめるものは養父善右工門(又左工門)や信州側住民の願望であつた。越中への嶽越え新道を開設のことであつたらうと思う。

〔前略〕右飯島善造、親年來の魂望を報せんと思慮する事久し。然るに御維新の時節に至り、右善造並有志の者、四五名申し合せ出願致し、昨年十一月許可を得る。此上は漸時新道開くべくなり。

是迄北越運送は越後糸魚川へ通り、越中の国より當村に至る、里程四十五里の通行なるを、此新道開修成功の上は、越中国新川郡へ、當村より里程十八里にして通行す。四十四里の間にて二十六里の道路を減ず、運輸賃金は勿論、旅行の庶人助成少なからず。是全御時政の御恵と諸人の祝大ひなり。

(後略)  
右之通當村地誌取調奉差上候以上  
明治九年六月

- 右村
- 副戸長
- 新井 忠三郎 不在
- 同 傘木 三五郎 無印
- 同

この資料によって、明治八年に新道開設認可があったものと思われる。

飯島家文書資料より

(資料の一)

金沢において約定の事(端書き)

規 約

一 新川郡原村ヨリ山中黒部川ヲ経界トシ、道修理資金等都而當方ヨリ出金可致事 但々道修理之義も又候同様之事

一 黒部川舟或者橋等之諸入費者、双方ヨリ半高宛出金之事

一 通行人等税錢往復共取受方両国同等之錢高二取極可申事

一 諸荷物継立ケ所者、双方便利之土地ヲ撰

取  
設可  
申事  
一 両県  
序諸  
事届  
方之  
義ハ、  
都而  
兩社  
示合  
之上  
相届  
可申  
事  
右今般  
開業御  
同心致



入山人足札

候、就而者道修理方尤精誠尽力いたし、不成功ヲ遂ケ度、仍而今極要之件々而己取極、尚詳細之義追日實地検査之上夫々御確約可致候、依而為後証一書如件

明治七年四月

寺 直道 印  
佐久間 盛武 印  
縮川 元 祥  
宮 橋 茂 平  
廣瀬 嘉右衛門

飯島善造殿

注善造は家督を継いでからいつも、金沢の開通社衆中と連絡していたことが伺える。端書にもあるように、この規約は金沢において取交したもののようである。

(資料の二)

約 定 證

一 新川郡原村ヨリ山中黒部川ヲ経界トシ道修理資金等都テ當社ヨリ出金スベキ事 往々道修理ノ費モ同様

一 修開道幅等互ニ申合同一ニスベキ事

一 修開着手者道程ノ長短ニ不関双方同時ニ取掛リ同時ニ落成スベキ事

一 修理中云々ノ事故申立手止致開敷事

一 黒部川舟並橋等ノ諸入費ハ往々半高宛出金スベキ事

一 諸荷物継立家建ハ上申方 法書ニ抛ヒ建築スベキ事

一 通商物等ニ至ルマデ道錢可差出支

一 通商物買入依托ノ節ハ其品物の代價大凡三分一中 勘相渡シ荷物運送ノ前全 金相渡可申事 中勘金ハ 品物ニ寄り増減適宜ニ其 時ニ示談スベキ事

一 道錢半高宛月々割當スベキ事 温泉湯治人ハ追テ 事定スベキナリ

一 通商方ノ約定方法等ハ別ニ 論定スベキ事 右今般互ニ 實地検査ノ上目論見相 立示談確定スルノ件々ナリ 仍テケ條ノ通毛頭違約 致間敷候為其定約書如件

社中惣代

明治八年口九月二十六日

寺西直道 印  
同佐久間盛武 印  
同安田貞久 印  
同安田靜躬 印

飯島善造殿  
海川三郎衛殿  
一 志雅人殿

訂 正

前号2P、最下段「昨年亡くなられた桜井一雄には」とあるのは桜井親次の誤りでしたので訂正し、お詫びいたします。

道程表

越中国富山ヨリ原村マテ六里斗原村ヨリ温泉マテ五里斗温泉ヨリ黒部川マテ三里斗黒部川ヨリ信州境針ノ木峠マテ武里拾八丁斗針ノ木峠ヨリ信州野口村マテ四里斗

通計武里拾八丁

池田本道通リ 松本ヨリ拾里  
松川本道通リ 信州マテ七里  
上田マテ二里  
大平越道通リ 野口ヨリ拾五里

原村ヨリ黒部川マテ里程八里道幅 敷間通リ修理家建寄出未未

道程表

(前大町市公民館長)

# 北アの初期登山者と

## 「五万分の一地図」

(5)

三井 嘉雄

針ノ木峠の南の北葛岳、船窪岳となると、現在でも少しあまいまいなところがある。大正二年版の五万分の一には、蓮華岳から南は不動岳まで全く山名が入っていない。このあたりの初縦走を「山岳」に発表した榎谷徹蔵は、現在の北葛岳を七倉岳としてあり、中村清太郎は北葛の頭と記している。長谷川如是閑によると北葛沢のアタマが正しいのだが、略して北葛岳と呼んだ、となっている。

小島六郎らが共著で昭和九年に発行の『北アルプス』には、昭和五年に修正された五万分の一の地図と比較して、「七倉岳（北葛岳）（二五〇メートル）を降りた七倉乗越が最も険悪を極めている。二四五三、五メートルの三角点を南方に分けている峰を不動堀沢岳（二五〇〇メートル）と呼び、五万分の一の図幅船窪岳は東沢の頭で、船窪岳は其の西、頂上の広く北へ延びている二四四〇メートルの峰頭を指すことになる。」と記されている。

山頂名で一番混乱したのは、なんといつても穂高岳である。大正初年までの「山岳」には東穂高岳、南穂高岳、北穂高岳などと、かなり乱雑に使用されていた感がある。現在の涸沢岳（三一〇三、一）のところは奥穂高岳とあり、前穂高の三角点にばかり少しい文字で穂高岳と記入があつて、西穂高岳のところは前穂高岳、南岳の三角点、北穂高岳となっている。それ以外には山名の記入がなかった。当時の登山者が、三角点のある現在の涸沢岳を奥穂高岳と理解したとしても、いたし方ないであろう。

さらに、悪いことには現在の奥穂高岳の位置が北に、涸沢岳に近よつており、そのため前穂高と奥穂高のいわゆる吊尾根が大きく北

寄りになったために、現在の穂高岳山荘のある白出しのコルが、図上では判然としていない。

大正七年に穂荊三寿雄は、この最初の五万分の一の地図を手に、小林喜作と楢一穂高を縦走したが、「五万分の一の地図をみると北穂高と記されてあり、頂上には測量のとき建てた三角点の櫓がある。悪絶無比などといわれている北穂高岳も案外容易なもので、早く着いたと思つて喜作にきくと、ここは横尾の南岳で、これから大キレットを越えてから穂高になるのだ。」（『山想雑記』）と回想している。

焼岳は、飛騨側の呼び方である硫黄ヶ岳となつていて、おまけにそのすぐ北にもう一つ焼岳の名がある。これは多分、予察四十万分之一の図の影響もあることだろう。

鷲羽岳と三俣蓮華岳の近辺も山名の置き方が少し狂つていて、現在の双六岳が蓮華岳と同じく三俣蓮華岳が鷲羽岳とあつて、それから北は水晶山（水晶岳）まで山名

の記入がなかった。

次に標高については立山と剣岳が、三千メートルを越すかどうかで関心が持たれた。大正二年版では、立山（雄山）が二九二九メートルで大汝山には標高の記入がなかった。立山の三角点は、山頂が雄山神社の聖域のために、少し下つた五の越に埋設されている。現在の図版では大汝山に三〇一五と記入され、剣岳をぬいて、このあたりの最高峰となつてゐる。一方、剣岳については、最初二九八八であったものが、昭和五年の修正版から三〇〇三となり、現在ではふたたび二九八八と記されているのである。

また現在の西穂山荘のところには二四三二メートルの標高の記入があつて（現在の図版には記入はない）、そこから現在の西穂高岳までの間には標高が記入されていない。つまり西穂高の独標（独立標高）と、今の図式では単に標高点と呼ぶ）といわれるピークは、本来、今の西穂山荘のあたりを指すのではないかと考えられる。この点について同山荘に問

い合わせたところ、山荘から一〇〇メートル位の位置に十字の刻んである大石があるとのことである。

それから黒部川に剣沢と樺小屋沢が流れこむ十字峽は、大正十四年になって冠松次郎が地図の間違ひを発見した。「この谷はと私はまた五万分の地図を拵けて見たが、そこには谷の入つている地形はない。しかし実際にはある。しかも剣沢と向ひ合ひに黒部の本流を挟んでだ。樺小屋沢かしらん。しかしそれは地形図によると、ここから二丁位上流で右岸から入るはずなのである。」（『黒部溪谷遊歩の思い出』）として十字峽と命名している。

以上、地名、地形の誤りは図上からすればほんの二点に過ぎず、五万分の一の地形測量がほとんど完璧に近い精密さでなされたという。ことに、今日のわれわれは尊敬と感謝の念を持つものである。（『山と溪谷』通信員）

### 図書紹介

**アルプスのトンボ** 倉田 稔 著  
以前に大町第一中学校に在職され、当時山博の嘱託学芸員として調査研究にご援助いただいた倉田先生が、十数年にわたる研究の一部をこのたびまとめられた。

アルプスにすむトンボの生活を、ぼう大な資料をもとに明らかにしていく、わかりやすい図表や写真が多く使われている。トンボと自然の関係なども長年月の比較観察で説明されているが、トンボに寄せる愛情が読む人の胸を打つ好読物。誠文堂新光社刊、九八〇円



立山（雄山）の一等三角点、中央の人物の手前 富山県立山町商工観光課提供

山と博物館第19巻第12号  
発行所 長野県大町市T.E.L.②二一  
印刷所 大町市下仲山岳博物館  
大糸タイムス印刷部  
定価 年額 四〇〇円（送料共）（切手不可）  
郵便振替口座番号（長野一三、二九三）